

高野 捧

まず最初にシーフィールドスクールに来たのは姉の萌 (Mollie) でした。

彼女は大学卒業後、2001年10月から八ヶ月に渡り、シーフィールドで英語を学びました。そこで彼女はロマン (Roman) というスイスの男性と運命的な (?) 出会いを得て、NZ生活の多くの時間を彼と過ごしたそうです。シーフィールドの先生によれば、萌とロマンはどこでもかこでもハグしていたとかなんとか・・・ともあれ、萌の日本帰国後



も二人の関係は継続し、彼女は帰国後一度スイスに行き、またロマンも一度日本に遊びにきました。私たち兄弟もつたない英語でロマンと会話することとなりましたが、彼の人の良さは言葉がそれほど通じなかったとしても十分感じる事ができたものでした。私たち家族の中でも英語を流暢に話せるのは萌だけだったので、ロマンの数週間の滞在の間は必死だったのをよく覚えてい

ます。それにしても萌の英語には驚いたものでした。NZに行く前は私よりも、というか英語は全くだった彼女はここまでイングリッシュスピーカーに慣れるとは思いませんでした。これも彼女のNZの努力と、ロマンとの出会いがあったからでしょうか。



そして、彼女が次スイスに行くときには結婚が決まっていました。2005年の5月、彼女の誕生日に合わせてスイスで結婚式が行われ、高野家も総出でスイスに渡り、彼女を祝福しました。

次にシーフィールドへと現れたのは私、捧 (Sasagu) です。春に大学の春休みを利用して7週間シーフィールドに通いました。7週間は長いようで短い期間であり、そろそろ慣れてきたかなあという時期に日本に戻らなければならま



せんでした。姉のことを知っている何人かの先生と会うことができ、彼女とロマンの写真を見せると彼らはとても喜んでくれたのを覚えています。短い期間であったため、覚えている人はいないとは思いますが、卒業式でのスピーチの最後に私は「I'll be back」といったのを覚えています。

三番目は兄の仰 (Aogu) です。彼は 10 月後半から 6 月後半までの滞在しました。彼も英語を学びたいということからシーフィールドに通い、NZ 生活を楽しんでいたようです。そして私は、またシーフィールドに戻って、六ヶ月ほど滞在し、二ヶ月ほど兄と生活を共にしました。最初は英語を学びにくるに当たって兄がすでにいるところに行くということに迷いましたが、海外で兄弟が同じ所で生活を共にできるというのもなかなか無いことだろうと思ったので再びクライストチャーチに来ることを決めたのです。

兄弟三人が海外で勉強する機会を持つことができるということだけでも十分レアなことだと思いますが、その三人が海外の一緒の学校に通うということはさらにレアなことのようになります。シーフィールドは英語を学ぶにあたっての十分な環境と知識を与えてくれるところであり、私たち三人がそう感じる事ができたからこそ、三人ともがこの学校に通うことを選んだのだと思います。姉の夫であるロマンと私たち兄弟が英語で話すことができ、また父や母がロマンとコミュニケーションをとることの手助けができるようになればと思っています。そしてそれぞれの将来にシーフィールドで学んだ英語が生きることを願っています。